

武蔵野日曜集会

真の葡萄樹

――ヨハネ伝第15章1～15節――

1995年7月16日

小池辰雄

根元現実 即如の世界 信仰でなく現実 わが愛に居れ キリストの栄光の現れ

【ヨハネ15・1～15】

1 我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。2 おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。3 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。4 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。5 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。6 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投入れて焼くなり。7 汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望みに随いて求めよ、然らば成らん。8 なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。9 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。10 なんじら若し、わが誠命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。11 我これらの事を語りたるは、我が喜悅の汝らに在り、かつ汝らの喜悅の満たされん為なり。12 わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ。13 人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。14 汝等もし我が命ずる事をおこなわば、我が友なり。15 今よりのち我なんじらを僕といわず、僕は主人のなす事を知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、我が父に聴きし凡てのことを汝らに知らせたればなり。

●根元現実

キリストの言葉は非常にはつきりしています。真理の言葉は断定的でなければダメなんです。断定的でないような

「…であらん」

なんていうのは、私は読む気がしない。そう書いてあっても、



「…なり」

と断定的に私は読んでいく。それでないと、力がこない。「…であらん」なんて言われると、私は気がぬけてしまう。現在・直説法が一番、真理の本当のすがただと私は感じています。

「我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。」

これは素晴らしい言い方です。葡萄の樹はたくさんあるけれども、

「私こそ本当の葡萄の樹だ」

という仰り方がおもしろい。葡萄に例えているのではなくて、

「こつちが葡萄の樹だ。普通の葡萄の樹は私の影だ」

と言わんばかりの気魄がある言葉です。

だから、キリストを飲まなければダメなんだ。キリストを食べなければダメなんだ。信ずるなんていうことではダメなんです。私は「信仰」という、信じ仰ぐなんていう言葉は嫌いだ。身体で受けとること、体受なんだ。体受する、全存在で受けとる。もう非常に現実なんです。私はこれを根元現実²といたい。根元的な現実です。そういう現実をいただいているから、私は疲れをしらない。人間だから眠くはなりますよ、けれども、

「ああ今日は疲れた」

なんて思うことはない。

「往生」という言葉がある。私は死なない。往生³する。次の世界に往つて生命を続けて行く。あなた方もそうです。「死ぬ」という言葉は嫌いだ。死ぬということはない。往生するんだ。肉体は焼かれたりするが、それはどうだっていい。パウロがコリント前書15章で言っているとおり、神さまから霊⁴体を、霊の身体をいただいて、次の世界ですーっと生き続けるんだ。お墓なんていうものはどうだっていい。

そういう烈々たる根元現実をもたなければ、私はやりきれない。また、それをいただいているから、力が来てしょうがない。西郷南洲はそういった烈々たる生命力をもっていた。どうぞ、皆さんも、そんな気持で勇ましく楽しく進んでいただきたい。

●即如の世界

² おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、い

よいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。

いよいよ聖化する。

³ 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。

キリストは

「我が言は生命なり、霊なり」

と言われた。キリストの「言」は意味の言葉ではない。霊であり生命である。キリストの言葉は意味の言葉でないから、実力がある。神の言はそうなんだ。創世記の始めの方を見



ると、神さまが言えばそれが直ちに実現している。実の在る言、実、言なんだ。それだからこれが実現する。

⁴ 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。
よく、

「居れ、居れ」

と書いてある。内在関係です。内住している。生命が一如の関係にある。我が汝か、汝が我が、わからない。我と汝とが溶け合って、融合している世界です。だから、私は「キリストを信ずる」とは言わない。

「キリストが私の中で生きてくださっている。私はキリストの中に入って生きていく」
る

と言う。そういう内在内住、内的生命関係です。だから、「信ずる」なんて言いたくない。キリストが神の子であることを信じたって何になるか。

今、日本では

「民主主義、民主主義」

というけれども、リンカーンはアメリカの民主主義の創設者みたいな人ですが、あのリンカーンはその前に何と言ったかというところ、

「アンダーゴッド」（神の下において）

と言っている。日本の民主主義にはこの「アンダーゴッド」という言葉がないんだ。「神の下において」という、絶対者を上に置かないような民主主義はダメなんだ。日本人の魂の世界は情けない。本当の平伏しをもっていない。

枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。

「信ぜずば」なんては書いてない。「居らずば」と書いてある。居る、即している、即如の世界です。

⁵ 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。

私たちはみなキリストに連なっているから、「枝」という。幹に連なっている。キリストという幹をもたないようなクリスチャンはダメだ。信ずるではダメなんだ、連なっていないければ。生命の延長ですから。だから、本当に連なっていれば、必ず果は結ばざるを得ない。

「連なっているながら果を結ばないものはダメだ」

とここに書いてあるけれども、そんな連なり方ではダメなんだ。

汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。

何かやっているようにだけでも、本当は、しているのではないという。

「我に居らずば何事も為し能わず」



とは非常に断定的な言葉です。

「私に連なっていないければ、何かやっているようだけれども、本当はやっているのではないよ」

というわけです。「神・キリスト・我」というものは聖霊に在つて、一如にされている。「十字架と聖霊」です。十字架で贖われているから、遠慮なくキリストの中に飛び込んでいけばいい。

●信仰でなく現実

大体が普通のクリスチャンの信仰が観念的だ、本当の現実でないんだ。だから、いくらやつても力が来ない。

「信ずる、信ずる」

なんてやつてもダメなんだ。私は、

「信仰なんかありません、現実だけです」

とはつきり言つてやる。信じ仰いで何になるかというんだ。普通の人が聞いたたら、

「随分、乱暴なことを言う先生だ」

なんて思うでしょうね。乱暴ではない、一番本当のことです。

キリストという原始力です。キリストは、

「我は始めなり、終りなり」

と言われた。原始にして終末である。「始めにして終りなり」とはイザヤ書からきている言葉です。

「このことは誰がおこないしや、たが成ししや、たが太初より世々の人をよび

いだししや。われエホバなり、我ははじめなり終りなり。」（イザヤ41・4）

とある。「終始一貫」という言葉がある。貫いている。

「信じている」

だの、

「信仰している」

だのと、そんなのは二段構えなんだ。現実なんです。空気から離れようとしたつて、我々は空気から離れるわけにいかない。しょっちゅう空気の中にいる。それと同じことで、キリストの中に在らしめられている。太陽の光の中にあらしめられている。地球上の生きとし生けるものは日光の光と熱の中に在らしめられている。それは生命ならざるを得ない。

ゲーテが

「キリストと太陽の前には無条件に頭をさげる」

と言った。そういう文人が日本にはいない。何といつても、聖書がもたなくなっていないとね。キリスト教ではないんだ。キリストの道なんだ。「教え」ではない。「教え」というと、何



かそれを聞いてどうのこうのという、そんな二段構えのものではない。「道」だから、自分でもって全身で歩かなければダメなんだ、道を知らんとするものは歩かないと。

老子が

「無道の道」

と言った。さすがは老子というのはえらい。孔子よりか老子の方が上です。

「老子は竜の如くしてとてもかなわない」

と孔子が言っている。

「汝ら我を離るれば、何事も為し能わず」

こういう断定的な言葉は非常に力があるから、グツとくる。私は断定してものを言われな
いと、気が抜けてしまつて読む気がしない。

●わが愛に居れ

6 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投入れて焼くなり。7 汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望みに随^{したが}いて求めよ、然らば成らん（成る）。

「成らん」も「成る」でいい。「居る」というのはキリストと一つとなることです。

「一つになつていれば何でも望みにしたがつて求めよ。現実が一つになつてい
ら、求めることがキリストに即しているから、全部それは成るぞ」

という。

8 なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、

うれしいことだと。

而して汝等わが弟子とならん。

「ならん」ではない。「弟子であるぞ」ということ。

9 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。

「愛したり」ではない。

「我も汝らを愛して来たから、今でも愛しているから、わが愛に居れ」

と。平伏して

「ありがとうございます」

の他に言いようがない。この愛には力がある。

「そうですか、どんな具合に愛しているんですか」

なんて言うのではダメだ。力ある愛だから、躓いても転んでも必ず立たしめられる。

●キリストの栄光の現れ

大自然と魂が溶けあっているような人間にならなければダメです。嵐になれば嵐となる。



無風になれば無風となる。微風ならば微風となる。自由自在です。太平洋を見れば、太平洋みたいな心になってしまう。アルプスを見ればアルプスのような心になってしまう。そういうように、大自然と融合するような魂にならないとね。

10 なんじら若し、わが誠命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。11 我これらの事を語りたるは、我が喜悅の汝らに在り、かつ汝らの喜悅の満されん為なり。12 わが誠命は是なり、わが汝ら愛せしごとく互に相愛せよ。13 人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。

棄身の愛なんです。本当の友情というものは、その友だちのためには身を捨てても差し支えないというほどのものです。そういうのを

「刎頸の交わり」
という。

「その友の為には自分の頸を刎られても構わない」という。

キリストは真の葡萄の樹で、我々はその枝である。キリストに連なつてなければ生命がない。キリストに連なつていけば、その人らしい果が結ばれていく。そして、その果が結ばれることは、花が咲き果が実ることは、それはみな神の栄光の現れで、キリストの栄光の現れとして御名を讃美する。自己満足ではない。キリストという葡萄の樹に連なつていると、我々はその人らしい花が咲き果が実つて、神の栄光、キリストの栄光が現れる。これが本当のキリスト者の人生の目的である。ただ讃美歌を歌うことではない。存在そのものが神讃美なんです。どんなことにでつくわしても、感謝と讃美があるのが本当なんです。

いわゆる幸福論ではない。幸福を目当ての人生だったら、それは功利主義になる。ヒルティの『幸福論』はヘタすると誤解される。アッシジのフランチェスコ、宗教改革のルター、それらは決して幸福論ではない。本当のことをしていると、楽しみは自ずからその中にある。楽しみを別に求める必要はないんです。

